審査の結果の要旨

氏名　谷口　明子

院内学級とは、疾患を理由として入院を余儀なくされた子どもたち（以下、入院児）を対象とする、病院施設に併設された学校である。入院児は、闘病の不安に加え、家族や友だちのいる日常生活の場から切り離された状況にあり、特別な援助を必要とする。しかし、入院児の援助に関する研究は極めて少なく、手探りで教育が展開しているのが実情である。

そうしたなかで、本論文は、院内学級における教育のあり方に焦点を当て、フィールドワークを手法として、その実態を丹念に記述、分析し、院内学級の教育活動のもつ援助機能を具体的に解明し、それを通して入院児への援助実践に寄与しようとするものである。

本論文は、4 部９章から成る。まず第 1 部では、第１章で病弱教育の歴史的変遷を辿り、第 2 章で先行研究を概観した上で、院内学級における教育援助機能をモデルとして提示することを通して入院児教育への提言を行うという本論文の目的が述べられる。

第２部では、第 3 章で入院中の子どもの不安を質問紙調査によって測定し、第 4 章では、その結果に基づき、病弱教育研究の方法を再検討し、院内学級の援助機能へのアプローチとして、フィールドワークをデータ収集法とする質的研究法の適切性が明示され、本論文の方法論が示された。

第 3 部では、第 5 章でフィールドとなるＺ院内学級小学部が紹介され、5 年間にわたるフィールドワークの詳細が述べられる。第 6 章では、参与観察、教師への半構造化面接、文書資料のデータ分析から、Ｚ院内学級の教育が多様な援助の要素を複合的に備えていることを明らかにした。第 7 章ではグラウンデッドセオリー法によって 7 つの教育実践カテゴリーを抽出し、それらをまとめる統合的テーマとして、入院児をめぐる援助システム間の関係性をつくる“ つなぎ機能 ”を見出した。さらに、そのテーマに沿って、８つの＜つなぎ援助＞カテゴリーを抽出し、院内学級の教育援助機能を示す＜つなぎ援助＞モデルを生成した。第 8 章では、第 7 章の＜つなぎ援助＞モデルを活用し、入院期間による＜つなぎ＞のあり方の変容プロセスモデルを提示している。

最後に第 4 部では、院内学級の教師が、日常的な実践の中で予防的観点から援助システム間の連携作りをすることの意義を明らかにし、心理教育的援助のためのアセスメントの観点として、＜つなぎ援助＞概念の実践的有効性を提言している。

本論文の研究対象は、院内学級としては非常に恵まれた環境にあり、本論文の知見は、他の院内学級全てにそのまま適用できるものではない。しかし、丹念な参与観察調査を行い、そこで得られた豊かなデータの質的分析によって院内学級の教育活動に備わった援助機能を明らかにし、援助モデルを生成し、さらには今後の入院児への教育的援助の方向性を具体的に示した点で、理論的にも実践的にも、また研究法の観点からも意義が認められる。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに相応しいものと判断された。